

幼児の製作の心理



桜

林

仁

1 作るということはどういうことか

子どもたちは、作ることに熱中しますが、こわすことにも、喜びの歓声をあげます。作ることも、こわすこととも、共に、環境の変革なのです。

人の生活は、環境と生活体との、相互作用によって生れてきますが、環境には、生活体の内面の生活が投影されて、主体的環境として、生活体験を支える役割が負わされています。ですから、心の生活は、環境の製作あるいは変革によって実現される、といつてもいいすぎではありません。

生活の実現をさまたげる否定的な環境は、破壊されなければなりません。製作活動が、たえず、人間の世界に生れてくることは、生活する人間が、たえず環境に不満を感じて証拠であり、そのフ

ラストレイションを越えて、生活に適応した環境をたえず製作しようと努力していることを物語っています。

子どもたちが製作する場合にも、作るということは、とりもなおさず、子どもたちが、子どもたちの生活を実現し、支えるために、環境を操作している、ということにほかならないのです。

もちろん、ここで、「生活する」ということは、当然、精神的・内面的生活を意味するのですから、それはまた、パースナリティーの実践でもあり、感情やファンタジーの生活でもあります。

私たちは、例えば、室という環境を暖色系でぬったり、暖色系の衣服をつけたりすることによって、暖かくて柔らかい快活なムードの体験的生活をもつことができます。それは、環境をそのように製

作ることによって、心をそのような状態にし、内面の生活をそのように支えているわけです。子どもが画用紙の上に暖色をぬり、暖色の色紙を使い、暖色の積木で家を作るのも、これと同じ原理で理解されてよいはずです。

こういう生活が、第三者によって局部的にながめられると、古くからいいならわされた「表現」ということばにふさわしく、また、ベースナリティーの投影でもあり、心の解放でもあり、臨床的な診断や、セラピーとしてとりあげられることにもなるのです。

2 生活させる映像を環境に刻む

さて、私たちは、製作ということを、このように理解したうえで、子どもたちが、なにげなくとりあげる色や形や空間の形成の中に、どのように、内面の生活や性格のあり方が、環境的映像として投影されるかを、アメリカの児童画研究家として有名な、アルシューラーとハトウイックによる分析を追って理解してみましょう。両女史は、特にカラーベインティングが、言語的表現の未熟な幼児によつて、言語に代つて自己表出を容易にさせ、生活における欲求不満や、内的コンプレックスをはきださせ、心のカタルシスの役割をはたすとともに、教育者や親たちにとって、子どもたちの内面の世界を理解し、ベースナリティーの把握やセラピーのために、たいへん意味深いものであることを示しました。

色相の選び方

まず、暖色を代表する赤を好んで使う子は、反応が自由で、外の規則に無関心でいるながら遊びなども協調的で、良い人間関係の持主といえます。不幸な子でも、幸福な瞬間は、赤を使う量がふえます。けれども、短い期間に激烈に赤を求める場合、敵意にしろ、愛情にしろ、強い情動に動かされていることを物語っています。

これに反して、青を使う傾向は、衝動的反応からコントロールされた行動に発達していく過程の中に現われます。

暖色の中でも黄色は、幸福で外向的で依存性の高い情動的な子どもが生まれますが、発達的には、幼児的段階を典型的に反映しています。寒色、ことに青とのコンビで使われる場合、「幼児・成長コンフリクト」のあらわれで、幼児的な役割に執着したい願いと、成長したい願望との相克になやむ関係を象徴していくまして、よく弟妹の生れた時に現われるようです。

では、緑色を好む子はどうでしょうか。彼らは、強い明白な情動に欠け、自制心や自尊心や自信に富み、日常おきまりの課程に協力的であり、秩序を整然と守り、用心深く、細心ていねいで、かつ、静かで目立たないが、適切な言語化を行ない、遊びにアイディアがありますし、また青が清潔と関連するのに対し、緑はしばしば黄と配合して、排泄またはそれに類似した汚れる行動に興味をもつ子によつて使われることもあります。

また、いつも黒ばかり使っている子どもにも、情動的行動に欠けたのがみられます。これは恐怖や不安による抑圧の反映であって、親がきびしく高度の知的要求を強いたり、兄弟の圧迫があつたり、家庭の不和や生理的ハンディキャップのある子に多いようです。それで、過剰適応であつたり、表面的適応に優れていたりするのです。とくに彼らは、健康な適応に欠けるので、攻撃的性、孤独性、防衛性をよく現わすようです。

これに比べて、オレンジ色を好んで使う子は、適度の暖かい情動性があつて、柔和な人間関係や快感にめぐまれています。また、内気な子が赤の代りに使つたり、空想的な遊びをさける子に愛用されたりすることもあります。

ところが茶色になると、汚れの願望をあらわし、青の清潔とコントラストします。家庭で早くから清潔教育を受けすぎた子が、不潔への興味のはけ口を、茶や黄土色に求めるのです。

ところで紫は、一般に使われない色ですが、これを固執的に選ぶ子が時に発見されます。その場合、その子が不幸であり、例えば、歯医者で苦痛な目にあつたりしているのを発見することがあります。さて、最後に、幾つかの色が使われている場合、ある色が他の色をおおいかくす関係が生れます。おおう色は外面的な態度を象徴し、おおわれた色の態度を抑圧しているのを発見しました。幼児によくある例は、衝動の暖色を抑制の寒色でおおう関係です。

また、色をいつも別々に離しておこうと努力する子は、環境の錠型に順応しようとして硬くなつていて、模倣性が強く個性喪失の危機にさらされています。色を混ぜ合せる子の方が、情動表現において自由で、外向的で、多彩なベースナリティーの持主ですが、でたらめに混ぜ合せるゴチャマゼ型は、むしろ、よごれのレベルにて、色の感受性も未熟で、情動表出過剰で、適度の統制に欠けていります。適当な年令期に、みたすことのできなかつた幼児のよごれの願望のはけ口として現わることもあるようです。

形態性と空間の処理

線と形による製作は、色の塊り式のものより、高度に発達した操作を必要としますから、衝動的反応から、抑制的適応に転換することによって生れてきます。いつまでも色に関心をもつ子に比べ、線形的造形に進む子は、より論理的で知的で計画的で、衝動的反応は少ないようです。

その内、直線を強調する子は、現実的なものへの興味や遊びにアイディアがあり、主導的・攻撃的・主張的・自己依存的・男性的・合理的・外向的で、とくに垂直にその意味があり、水平化は否定的態度を象徴しています。

これに反して、曲線を強調するのは女性に多く、従順で、受動的依存的で自信がなく、ひっこみじあんで空想性にとみ、情動的で、自己中心的で、おとなとの注意をひきたがるものです。

次に、空間については、画面にあふれて、外にはみだす傾向の子は、一般に、外部の期待に無関心であったり、情動の抑制が弱かたり、権威や規則を無視し反抗し、愛情不満の傾向があります。

これに比べて、極く限られた空間に、しょんぱりと描く子がいますが、内気で、依存性の強い傾向がみられ、丸っこい輪郭を描いては塗り込むというやり方をよくしています。

画面につりあつた大きさを作る子は、一般によく整った思慮があり、他の者と平和な関係をもち、人気がある子が多いようです。また、要求水準の高い子、背が低くて大きくなりたがっている子は、上部を強調しがちです。中心を強調するのは自己中心的ですが愛情があり、また、抑圧された態度を左側に、装った態度を右側に描く傾向が見られます。

3 幼児的造形性をめぐる新しい自覚

幼児画を発達的にみますと、錯線描きから図式画をへて写実に近づく徴候が現われますが、古来、造形教育は、発達をそく進させる意味で、なるべく早く写実の段階へ児童をおしやることでした。

ところが、二十世紀が生みだした革命の一つは、カメラという写実の魔術師を出場させたことにして、手仕事の写実存在は、当然、影のうすいものとなりました。その結果、造形は客体主義から主体主義へと転換して、主体の掘下げへと集中し始めたのです。

折しも、主体の究明に不可欠の心理学が、新しい科学として育ち始めましたし、文明の交流は、文化の輸出の時代から逆流の段階を生み、写実の文明人に、幼児的な未開芸術の主体的な魅力を発見させたのでした。おとなとの世界での価値の転換は、こどもの世界での造形教育のプリンシップに変革を与えないはずはありません。

描画以前として輕視された幼児初期の錯線描きは、オートマティズムとか、アクションペインティングとか、アンフォルメルとかいう前衛的イデオロギーのもとに、おとなとの世界に厳然たる存在を占めたのです。

また写実の骨格をなすルネサンス的透視法は、一つの視拠点によることを鉄則としていたのに、キュービズムの出現は、幼児の図式画と同じように、多くの視拠点をもつことに、より高い表現価値を認める思想を生みだしました。

また、かくれて見えない物が描き出される幼児の「レントゲン画法」も、また視覚よりも有機体内に感じる感覚に基盤をもつハブティック主義も、幼児造形の特質であるし、対象物を表情的に把握する方法も幼児の典型です。

私たちは、幼児的製作を肯定することによって、幼児的生活を支えるばかりか、おとなとの世界へも持ってきて、おとな的生活を豊かにするよう、補強する努力をしなければならないのです。